

## 平成 28 年度 第 1 回人権読本ぬくもり第 3 版検討委員会 議事録

- 1 日時 平成 28 年 6 月 14 日(火) 14:00～15:40
- 2 場 所 教育委員会会議室
- 3 出席委員 12 名
- 4 傍聴人 なし
- 5 議事

### 【委員長】

高齢者の人権問題については、高齢者自身の尊厳が人権としては重要な課題だと思う。思いやりだけではなく、高齢者自身が普通に生きて、若い人と一緒に仕事をして、社会参加ができるのかという視点も大事ではないか。

### 【委員】

情報モラルに関わる題材が中学校版では一つもないが、中学校こそ色々問題が出ているので、必要ではないか？

### 【委員長】

禁止しようが何しようが止められないので、モラルをきちんと身に着けさせる方向で取り上げたらいいのではないか。情報モラルについては、日々進んでいるので、我々は後れを取っており対応ができていない。うまく取り込んで、先んじてやれるような題材が必要。

### 【委員】

18 題材ということだが、項目をみると 20 題材ある。スケジュール的に大変ではないか。

ガイジ発言は、小学校版の「ぬくもり」でも 2 つ取り上げているので、中学校でガイジ発言だけで一つの題材にしなくてもいいのではないか。9 番のガイジ発言は障がい者問題の一部であり、障がい者に対するマイナスイメージが根強いことが大きな問題である。8 番の「いのち」と 10 番のガイジ発言の 2 つのテーマを一緒にした題材があり、そういう題材のまとめ方もある。

### 【委員長】

新しく作るぬくもりが、新しい時代に対応しているかどうか？ということを考えたときに、今の段階では、いいものがあれば 20 題材になっても色々出したほうがいい。精選したり統合したり、柔軟なやり方ができればいいと思うが。

### 【事務局】

小学生版も 18 題材としており、執筆者の関係やスケジュール等も考慮すると、増やすのは難しいと考えているが、これは是非取り上げたほうがいいということであれば増えてもいいと思っている。

本日は、題材を検討いただく場なので、作業部会以外で出た意見も紹介している。20 題材にしたいという意味ではない。

情報モラルは、10 年間使う中で情報が変わっていくのでどうだろうかと思いつているが、ご意見があれば検討したい。いのちとガイジも一緒にした方がいいということであれば、検

討したい。ガイジ発言は中学校でも起こっているので大事なものだという認識ではある。

**【委員長】**

ガイジ発言も10年後には変わっているかもしれない。今後も違う形で出てくることも考えられるので、本質に触れるような題材があればいい。

平和教育については常々思っていることだが、平和教育が他人事で語られている。国際戦争も含めて、戦争をしない力になることが必要だ。題材案が複数あるが、作業部会でも議論が必要だ。

**【委員】**

同和問題では、結婚差別の題材がない。同和問題の2年生に出てくる島崎藤村の破戒は、難しいのではないかと？結婚差別が一番問題になっていると思うので、就職差別と一緒にするなど考えてはどうか。

**【委員長】**

近現代の部落史で、島崎藤村の破戒があがっているが、これを通して子どもたちに何を学ばせるのかというところが大きい。昔は大変だったね、で終わるのが一番いけない。

**【委員】**

就職差別は、中学校においては20年以上やっているのだから、題材的に新しい視点で切れるのか？新しい観点にするための努力、工夫がいる。結婚差別とつなげていくということも考えてはどうか。

**【委員】**

就職差別は学校にノウハウがあるので、ぬくもりで取り上げなくてもいいのではないかと。

**【委員】**

就職差別の事例はあるが、それが同和問題に関わっているかという点、かなり見えない。

**【委員長】**

就職差別が問題になったのは、かなり昔の話。昔は中学卒業して就職していたから、それが統一応募用紙に繋がっていった。現在、違反質問も含めて部落差別の課題があるかどうかをきちんと吟味しないと、教材自体の賞味期限が切れてしまうということになりかねない。

**【委員】**

同和、平和にしても、題材として中学校現場で蓄積されたものがある。旬なもの面白そうなものが見当たらないのが気になる。同和や平和が3題ずつあるが光るものがない。

**【委員長】**

すきを突いて出てきたのがヘイトスピーチ。表現の自由の切り方がなかなか難しい、そういうことに対応できる、それを超えるような新しさが欲しい。

**【委員】**

アントレプレナーシップのような将来を見据えたような中身、だから頑張ろうねというような内容が盛り込まれたような題材が1つ2つあっていい。

**【委員長】**

ぬくもりは初版から3回変えている。現場が、むしろ追いかけてくるぐらいの新しさが欲しい。

### 【事務局】

同和問題については、中学 2 年に社会科で学習が行われるということで、小学校で賤称語を学ぶ題材を作成し、社会科の中で使ってもらうようにした。中学校においても、社会科の授業でぬくもりを主教材または副教材として使ってほしい。

作業部会では、結婚差別は中一では早いのではないかと？外国人のヘイトスピーチの話も国会で出ており、そこに関する教材が必要じゃないかという話もあった。

新しい視点として、こういう視点でこういう教材を作ってみてはどうかという明確なものを検討委員会から出してほしい。

### 【委員】

差別する側、または傍観者と言われている人間が同和問題に対してどう向き合って、どう解決しようとするのか？の視点が欲しい。される側が差別を跳ね返す教材もあるが、そんな人ばかりではない。むしろ大多数の人間はする側で、そこに気づいて生きようとしている生き様、そのプロセスのほうが大事ではないか。

結婚が早いのでは？という話があったが、結婚というよりは彼らにしてみたら恋愛。カミングアウトするかしないかが今でも論議になる。

同和問題に限らないが、差別は、暗くて、辛くてみたいなのが多いので、そうでないでしょ、というお互いわかっていけるような教材になればいい。

### 【委員長】

差別をする側が悪者扱いで終わってしまう題材だと好ましくない。

むしろ誰もが差別する側になる可能性があり、そこには、人間の持っている業のようなものがあるわけだから、それをごく自然に癒していくような、そういう観点が必要。

結婚観自体が変わっていることもあるので、人間関係のなかでの恋愛、友情、部落差別の問題とかを拾っていかないと、ついに見なくて終わってしまう問題になるかもしれない。

### 【委員】

島崎藤村も取り上げたことがある。字が読めない、昔の困難な状況に置かれていることから、差別はいけないという視点で教えてきた。

最終的に「君たちが大人になったときは、今まで過去起きた差別が全くなくなってしまうんだ。」という展望で卒業させたい。明るい将来の展望が出るような題材が 3 年生の場合欲しい。今まだ差別はあるが、僕らはそうはならない、立ち向かうという視点が欲しい。

### 【委員長】

子どもたちの未来は、彼ら自身が作るわけだから、元気が出るような題材がいい。

### 【委員】

障がいをもって生きる子どもたちの世界も同じだ。

2014 年 1 月、日本は 141 番目の障害者権利条約締結国となった。国連の議場で議論が白熱する中で「私たち抜きに私たちのことを決めないで」日本代表障がいの言葉が国連で響き渡ったといわれている。締結国になるまで日本は相当な時間をかけたが、多くの障がい者関連団体が大同団結して、この障害者権利条約の批准は新たな大きなスタートとなっている。

後から続いてくる、障がいをもって生きる人たちの一助になることを願い、社会そして教

育のお力で育てていければと願う。

今年度、「障害者差別解消法」もスタートしたが、今では、パラリンピックもオリンピックと同等に取り上げられ、障がいをもつ人に大きな勇気と希望をもたらしている。

障がいをもつ人の中にも、たくさんの素晴らしい人がいる。さかのぼれば、野口英世博士、2002年ノーベル賞の小柴昌俊博士、体育の教師から一転、鉄棒事故で手足が全く使えず、筆を口にくわえての美しい花の絵と詩で、常に勇気を与えた星野富弘さん等。そういう強くたくましい生き方を、子ども時代に感じとり育ててほしい。

私も、今、微力ながら、できることで社会の役に立ちたいと、小学校の「総合学習」に積極的に参加している。そこでの話は「あたりまえ」であることの素晴らしさでいつも締めくくる。障がいのある人、ない人がお互いに力を支えあって思いやり、やさしい人に育つことを心から願っている・

#### 【委員長】

子どもたちが、こういう教材を通して学んでいくと、当たり前の社会が差別のない社会になるというようなプランが見えればいい。今までは、辛い、きついかいいうばかりだったので、切り替えていく時期かもしれない。

#### 【委員】

もう一方の視点でスペシャルオリンピックスの視点も持ってほしい。パラリンピックは、どうしても記録に目が行くが、スペシャルオリンピックスは知的障害者を対象にした取り組みで、勝ち負けではないというのがスローガン。両方の視点が大事だと思う。

#### 【委員】

身体障がい者へのマイナスイメージは少ないのではないかな。むしろパラリンピックなどを通して、活躍している人に対して、凄いなあという気持ちがある。学校で発生しているガイジ発言については、知的障がい者に対してのマイナスイメージが背景にあるように感じるので、そういった視点でも今の話はなるほどと感じた。

#### 【委員】

障がいの状態でどうしても差は出るが、残された自分の力を発揮できる場所があれば、こんなありがたいことはないし、小さい力を出し切れる社会が望ましい社会だろうと思う。

#### 【委員】

人権8課題の題材もバランスよくでているし、デートDVやLGBTなど旬な話題も入っている。あとは、昔から大事にしている同和問題、平和教育の内容の工夫の問題だと思う。

宮竹中の事例も面白い切り口になるかと思う。「思いやり」については、上からの目線にならないよう、の言い回しに工夫は必要だが、中学生がどんなふうに関われるかという話は新鮮で面白いと思う。

宮竹中の事例も面白い切り口になるかと思う。思いやりの言い回しはあるが、中学生がどんなふうに関われるかという話は新鮮で面白いと思う。

#### 【委員長】

する側の問題は、真面目に取り上げていった方がいい。しかも負の方向ではなく、より良い方向で見えていくという見方があれば、差別をされる側の観点が並んでいると、差別の種類

が増えた分だけ教材の種類も増やしていかなければならなくなるが、する側のまなざしをいい方向、しかも後ろめたくなく変えていける題材が入っていればいい。

**【事務局】**

小学校における賤称語の指導の徹底を打ち出して、全小学校に指導している。

中学校はどのように取り組んでいるのか？賤称語の学習について踏み込んだ題材があってもいいのではないかと思っているが、ご意見を聞かせてほしい。

**【委員】**

賤称語の指導は大事だと思うが教え方が難しい。ぬくもりは担任の先生が使うことが多く、普段、部落史を教えない社会科以外の担任が専門的なことを教えていくのが不安である。

**【委員】**

私が若い頃は、えたひにんという賤称語が出ると、差別事象として大きくクローズアップされて、30年以上前は人権学習もすごく時間をかけてやっていた。今は薄くなっている。あの時代社会科の教員は、江戸時代の身分制度を教えるとき、この言葉は絶対に遊び半分で使ったらいかんと言って、力こぶ入れて一所懸命教えた歴史がある。

**【委員長】**

1871年の解放令から140、150年たっているので、子どもたちの感覚もだいぶ変わってきている。今の子どもたちに見合った対応が必要。

賤称語としての存在を完全に歴史用語に持っていつてしまう時期がもうすぐくるだろう。賤称語として使わなくなる時代が来る。要するに使っても意味がない。ただ、まだどう見るかというのはあるが、おそらく50年すれば意味がなくなってくる。

**【委員】**

言葉が持つ差別性を認識する必要がある。それによってどんなに傷つくことにつながるか、人の存在を子どもたちも教員もキャッチするアンテナが必要。言葉がもつグサッと刺さるような言葉が世の中にあるというのを学習させる機会が必要。

**【委員】**

ぬくもり初版の6年生版の中に賤称語と身分の外にという表現を初めて出した。改訂版でも賤称語はずっと残っているが、小学校段階での賤称語指導は、2015年度も含めて5割程度しか実施していない。今回、しっかり教えていくという方針を市教委が出しているので、中学校でも避けては通れない。賤称語の指導に当たって、小学校から連続する形できちんと取り上げるべき。

**【委員】**

子どもに授業を教えていくとともに、それを教える教師の研修もあわせてしっかりやっていくことが必要。人権教育指導の手引きや部落問題学習指導事例集を活用し、自身がしっかり勉強して、怒りを持って教えることが大事だと認識しており、現場にもしっかり伝えていきたい。

**【委員】**

差別は見たくない、大変だ、つらい、当事者でなくてよかったとかでなく、題材の中にそうじゃない視点をどう切っていくのか。題材としては必要だが、それをどう切っていくのか

が大事。

**【委員長】**

禁句ではなく、言葉として不愉快であるという常識の中に持っていくことが大事。子どもたちが、使ったらダメな言葉ということではなく、使うと不愉快になる言葉として認識されると思えば使わない。

**【委員】**

小学校は、人権学習は社会科の学習で使っている。社会科の教科で部落史を教えている。

中学校は、部落史は社会科で教えているが、人権に関する部落問題学習は担任の先生が教える。昔は集中人権学習もあり学習会等で勉強していたが、教育課程の変遷の問題もあり、今は時間的な余裕がなく、だんだん薄くなっている。

**【委員】**

ただ、大事なことから、きちんとやっていかないといけない。

**【委員】**

今は、多くの学校が11月に授業をしている。人権教育を推進しているのは、社会科の先生だが、人権道德の担当者会議あり、年間計画を作って人権道德の提案をしている。

時間的に厳しくなっているが、その分見直しを持ってやっているという実態もある。

**【委員】**

障がいというものの考え方に、線を引いて障がいのあるなしで分けるという古い考えがあるが、平成19年度から、特別支援教育が始まり知的な遅れがない中での発達障害があることも含めて、障がいには、はっきり線を引くのではなく、境界線がぼやけているという考え方をしている。

たとえば、健常者でも、病気になったり事故にあえば、とたんに障害者になる。いつでも障がいは隣りあわせになっているという意識を持ってほしい。家族の中や親戚など、親しい人の中にもいるかもしれない。ガイジ発言は障がい者を見下すようなことばということを知っておけば、周りや身近な人に障がい者がいれば、ガイジ発言はできない。

題材の視点としては、障がいについて自分は違うという事ではなく、隣りあわせになっているという表現や内容を入れてほしい。

自分に当事者意識があれば差別は起こらないので、特別支援学級との交流学习などでお互いを知って、差別がなくなっていけばいいと思う。

**【委員長】**

今日の意見を踏まえて、作業部会で検討してほしい。

6 今後の予定について

7 閉会